

ムーンメモリア・ロストノイズ
五話・旅立ちの宴

雨和七瀬

城下町の兵士居住区の片隅、ぽつぽつと明かりが灯る集合住宅の前でルークは足を止める。入り口にある共鳴石の一つをコツコツと叩くと、少し間が空いたのちに扉の鍵が開く。ルークは中に入ると奥まで進み、ユノの部屋の扉を改めてノックする。部屋の中から「はい」と、ブランカの声が返ってきた。覗き穴から漏れていた光が消え、「あ、ルークさんだ」という声が聞こえてくると、ブランカが扉を開いた。中ではユノが椅子を後ろに傾けつつ出迎えた。

「よ、ルーク。王様の反応はどうだった？」

よく見たらユノは先ほどまでルークが食べていたのと同じ赤苺のケーキを手づかみで頬張っている。

「ブランカについて詳しく調べる価値がある、と深く興味を示された。お前と一緒に異物の魔物を討伐させて、武器とブランカ本人の詳細を調査するのが次の任務だ。数日以内に令状が届く……」

「じゃあ、オレ達ししばらくブランカと一緒に居られるのか!? やったー!!」

ルークが話し終わる前に、ユノはルークに飛びついたかと思えば、今度はブランカに抱き着いた。

「えへへ、二人にはお世話になります」

ブランカもユノに手を添えつつ、目を細めて笑う。その光景にこの半日の間二人が楽しく過ごしたことを確認できたルークは、ふう、と息を漏らした。

ユノがおもむろに立ち上がり、酒が並ぶ棚を物色し始める。そして他よりも少し高価なベリー酒を手に取り、くるつと振り返る。

「上げちまうかあり、祝杯！」

「……」

ユノがこの部屋の主である以上、ルークは眉間に皺を寄せる以上のことはしなかった。ユノはルークの表情を気に留めず、杯を一つ机に置く。そして手で栓を無理やり抜き、並々と注いでいく。

「お酒ですか？ 甘い香りがする……」

「そうだろう、この醸造所の酒は香りが良いって有名なんだよ。……飲む？」

ユノは瓶の口を二人に交互に向ける。ルークは瓶の口をくい、と上げ、それを止める。

「俺は飲まないし、ブランカは見た目からして酒を飲む年じゃない。勧めるな」

ユノは「そうかあ？」と不服そうにしつつ、すぐに「ま、なら一人で飲んじまお」と言いながら瓶を置き、にやりとする。

「でも一人で飲むのもなあ……あ、ジュース出すか！」
ユノは氷石箱から新しい瓶を出す。

「氷石箱買ったから試しに入れてたんだよ。おおう、キンッキンに冷えてやがる、スゲー！」

ユノはうっすらと霜の付いた瓶をペタペタと触り、高価な魔法道具の性能に満足そうにしていた。その瓶も手でこじ開け、新たに出した二つの杯に注ぐ。

ルークは氷石箱を眺める。中が氷の魔石できているのが基本構造であるものの、魔力の供給源として取り外しのできる準魔石が蓋に付いているのが見えた。

（なるほど、魔力が切れたら込め直す想定がされている。あの道具屋ならではのやり方だな……ん？）

ルークはユノに杯を差し出されていることに気付き、冷たい杯を受け取る。

「よし、じゃあブランカとの縁を祝して、かんぱーい！」
ユノが杯を突き出す。ルークがユノの杯に自分のものを合わせると、ブランカも恐る恐る腕を伸ばし、カチン、と音を鳴らす。冬の川よりも冷たい杯を口元に運ぶと、唇が張り付いてしまいそうになる。ゆっくりと傾けて、柑橘の味を堪能する。

「冷えてておいしいです〜」

ブランカは一気に飲み干し、杯をユノに差し出す。ユノは酒で頬を赤くしながら、ブランカに次の一杯を注ぐ。「美味いだろ〜？」

ユノはブランカの杯に注ぎ終わると、今度はルークの方を向いた。

「ルークも次いるか？」

「いや、いい。ブランカが気に入ったなら飲ませてやれ」

ルークは半分しか残っていないジュースを、ちびちびと飲みながら、二人が楽しげに話すのを横目に調査の予定を組み始めた。

「……いやー、本当にブランカを連れてきて良かった、オレの判断は間違ってたな！　そうだろお、ルークう」

一人でひと瓶を空にしたユノはすっかり酔いが回り、ルークに絡んできた。既に何度か押し返してはみているものの、ルークは肩を組まれるくらいは甘んじて受け入れるしかなかった。

「……良い判断だったかは、これからの調査で決まる。俺たちが今評価を下すものじゃない」

「ええ〜、お堅いなあ」

ユノが息を漏らすことで増した酒の匂いを、ルークは手で払う。

「あの、大丈夫ですか……?」

ブランカはユノとルークを交互に見ながら、わたわたとしていた。ルークはユノを落ち着かせるためにジュースを注ぐように頼もうとして、ブランカの杯に最後の分が注がれていたことを思い出した。

「少しすれば解決する。ただ……ブランカ、代わりに皿や杯を籠に入れておいてくれないか」

ブランカは一度台所の方を向いたが、ルークが扉の横の籠を指すと「あ、あれですね、了解です!」と、てきぱきと杯を籠に入れていく。

「でも、なんで籠に入れるんですか?」

「あゝ、何日かに一回さあ、道具屋がこの辺の部屋に住んでる奴らの皿をキレイにしてくれんだあゝ。親切な奴だろお?」

ユノは間延びした声で答える。魔法道具屋は兵士たちに慈善活動に近いような行動で自分の店を宣伝しているとルークは解釈した。

「商魂たくましいというか、何と言うか……なるほど」

そのうえでルークは兵士たちの態度に合点がいき、眉間の皺を深めた。しかしブランカはまだキョトンとしている。

「ユノさんなら、ルークさんの魔法で綺麗にしてもらえば良いんじゃない?」

ユノはその手があったか、と言わんばかりに体をむくりと上げ、ルークを見る。ルークは首を横に振る。

「まあルークは忙しいし? 別にいいけどよお」

ユノはルークに絡むのを止め、寝台に音を立てて仰向けに寝転がった。そのままユノは目を閉じ、呼吸をゆっくりと整え始めた。

ルークは腕を組み、ユノに語り掛ける。

「調査の間、道中でくらは道具屋と同じようなことをしろと言うのであれば構わないが、宣伝のために安売りされている魔法を誰でもできると思われるのは心外だ……」

ルークの話を遮るように、ブランカがルークの服の裾をちよいちよいと引つ張る。ルークが何かと問おうとすると、ブランカは口元に手を添え、声量を落とす。

「ルークさん、ユノさん多分もう寝てます」

二人が口を噤むと、ユノの寝息が耳に届く。

「……はあ、この酔っ払いめ」

ルークは寝台の下に垂れた布を拾い、寝そべるユノの上に被せてから、椅子に座り直す。そして再び机の上に置いてある地図を見ながら、完成形に近づいた調査の草案を練り始めた。

家主であるユノが寝てから、部屋はルークがサラサラと手帳に書き込む音と、外から少しだけ潜り込んでくる話し声だけが聞こえてきた。

(草案が完成したら帰るか……ん)

ルークは顔を上げ、ブランカを見る。ブランカはずっと何をするでもなく座っていたようで、ルークの視線に気づくと「なんでしよう？」と首を傾げた。

「ユノはお前の宿を用意したか？」

ブランカは首を傾げたままだったが、ルークの言葉の意味を理解すると、「あ」と声を漏らした。

「そんなような話自体はしたんですけど、具体的なことは何も……」

ブランカはユノの心地よさそうに眠る顔を見て、顔全体をしわしわにした。

「あの、ユノさんはここに泊めてもいいって言ってましたけど、もしかして……ダメ、とか」

ルークはブランカの聡明さに改めて感心しながら頷く。「部外者を泊めるのは規律に反する。保護する目的だ、と反論の余地はあるが、これ以上の揉め事は避けたい……出発まで近くの宿を借りるか」

ルークは広げていた手帳や地図をしまつて立ち上がる。ブランカが立ち上がらずにきよとんとした顔をしているのを見て、ルークは説明を足す。

「とつくに日が暮れていて、空き部屋が残っている宿は少ないだろうから、急ぐべきだ」

ブランカは「た、確かに……！」と言いながらバタバタと荷物をまとめ、席を立った。ルークはブランカの準備ができた事を確認すると、扉を開けた。

「ユノさん、お邪魔しました」

ブランカはユノが起きないくらいの声でそう告げると、先に歩き出していたルークの後を小走りで追った。

二人は兵士居住区を後にし、ルークは頭巾をかぶって大通りに出る。

「最低限の寝る場所の確保だけで構わないか？」

ブランカは城下町に来るまでに泊まった宿では簡単な食事が出ていることを思い出し、頷く。

「はい、お金を出してもらおう立場なので、わがままは言いません」

ルークは「話が早くて助かる」と言うのと、早々に大通りから、これまた少し大きめの通りへと曲がる。

「あの、そっちってお金持ち向けのお店が並んでるって聞いたんですけど」

ルークはピタリと足を止め、振り向く。

「……そうか。まあ、ついて来い」

ルークはまた歩き出したが、ブランカが早歩きを緩めでも追いつけるほどに遅くなっていた。ブランカはルークに追いつくと、ルークの顔を覗き込む。ルークは考え込んでいるような表情をしていたが、ブランカと目が合うと咳払いをして誤魔化した。

「人の顔をジロジロと見るな」

「すみません、宿に着くまでお話ししようと思つて」

ブランカは深呼吸をする。

「でもルークさんとどんな話をすればいいか分からないんです」

ブランカはもう一度息を整えるように深く呼吸する。

「……そうだな、むしろ互いを知らない人間はそうあるべきだ」

ルークはブランカと目を合わせる。

「どうせすぐ着く。好きにしろ」

ブランカは驚いたのちに肩を落としたが、何かに気付いたように背筋を伸ばし直し、かと思えば頭を抱え始めた。ルークはその様子が気になって目を向けるが、少し前の自分の発言を思い出し、目を逸らす。

「ルークさん」

ブランカがルークに話しかける。

「昼にルークさんが居たお店のクッキー、美味しかったです」

「……そうか」

ルークは趣味の時間を見られていたのを改めて意識すると、頭巾を揺らして頬を冷まし始めた。

「甘い物がお好きなんですよね、ユノさんから聞きました。……他にもおすすすめ、ありますか？」

「……あの店なら、スコーンが良い。ハーブティーに合う」

ルークはちら、とブランカを見ると、ブランカは唾を飲みながら聞いていた。

「すこーん……!!」

「……朝食代わりにもなる、明日にでも食べればいい」

ルークは豪華な装飾が施された建物の前で足を止め、頭巾を脱ぐ。すると玄關番がルークの顔を見るや否や、顔つきが変わった。ルークが入り口に近づくと、玄關番は重い扉を開けた。

「……どうぞお入りください」

玄關番に促されるまま、二人は中へと入った。視界の先では受付の男が深々と頭を下げていた。

「ようこそいらつしやいました、ルーク様。本日はどのようなご用件で？」

「この客人に数日泊まれる部屋を用意したい。空きはあるだろうか」

受け付けは「ご用意いたします」と言い、従業員たちに指示を出すために一度奥へと向かった。

「……顔パスつてやつですか？」

「顔……そんなところだ」

そんな会話をしていると男が戻ってきて、ルークに鍵を渡した。

「三階の部屋をお使いくください。彼がご案内します」

二人は黙って従業員について行くと、頑張れば十人は泊まれそうな部屋に辿り着いた。寝具も三人は横になれる幅広さで、ルークどころかユノが入れそうな服の収納棚まで置いてあった。泊まる本人であるブランカは口も目も開けて固まっていた。

「こちらになります。どうぞごゆっくり……」

従業員はそそくさとその場を後にした。ルークは話しかける機会を窺ったが、ブランカはずっと困惑していた。

「……ブランカ、俺は家に帰る。朝食代を渡すから、明日の朝は自分で何とかしてみろ」

ルークはブランカに小銭が入った小さな袋と部屋の鍵を渡すと、踵を返した。

宿を出た後、ルークは振り返って宿の明かりを見る。

三階の部屋の明かりが灯っていることを確認し、彼は帰路についた。

〈六話へ続く〉